

一人ではなく チームでつくる保育

富久ソラのこども園ちいさなうちゅう
本園



みんなで寄り添う子どもの育ち

富久の保育の課題を話し合う中で、年度が改まり担当保育士が交代すると保育のやり方が変わり、毎年各学年で異なったクラスルールが存在した。また、今年度は4月に緊急事態宣言が発令され、解除後も通常とは異なる保育の提供が求められた。

新生活様式を取り入れた保育を行う中で、子どもの育ちの連続性を考えているのか、園生活を過ごす際の子どもの戸惑い、特に乳児クラスから幼児クラスへ進級する際に影響を及ぼしていないかなどの問題点が挙げられ、富久での保育について再度見直すことに焦点を当てた。

0歳から5歳までの生活の連続性と全園児の個々の発達や特性の共通理解を得たいが、他のクラスの内容や子どもを知る機会は少なく、難しい。

そこで『一人でなくチームで作る保育』をテーマにし、様々な保育士の視点で保育を行いながら、園全体に視野を広げることで一人一人に合わせたより良い保育につながるのではないかと考えた。

交換研修を通して互いの気づきや発見

他クラスを知る機会が少ないという現状を改善するために以下の方法で研修を行った。

- 事前に各学年のデイリープログラムを作成し、職員全員が周知できるようにする。
- 研修日を設定し、一日一組の保育士が互いの学年に配属。
- 子どもの生活や保育士の連携にねらいを置き、保育補助として保育にあたる。

交換研修した保育士は①生活について②環境について③活動内容についての三つの視点に着目したレポートを作成。交換研修を受けたクラスはレポート内容を共有し、保育の改善に活かしていた。

保育士の必要性

研修報告書の中で多く上がった意見が“食事について”だった。

昨年度までは保育士が子どもと食事をしていて、一緒に食具の持ち方や姿勢を整えることができていた。また、栄養士も食材の話をしたり苦手な野菜の働きなどを伝えたりしていたことで、保育士のみならず、園全体の職員が携わり、チームとして楽しい食事の雰囲気づくりをしていた。

しかし、生活様式が変わったことで、幼児クラスは子どものみで食事を摂ることになった。その結果、以前に比べて食事時間が長くなったり喫食量が減ったりしており、職員の中でも気にかかっている点であることが分かった。

言葉がけの大切さ

今回の研修を通して食事面に止まらず、生活のいろいろな場面で保育士が担う役割(立ち振る舞いや言動)が見本となることを再認識することができ、園内研修で人権や言葉遣いに関して学ぶ機会も持てた。また「子どもの育ちの連続性」に関しては、この期間だけでは結果を出すには難しいと判断し、今後も園内研修等をして富久の保育を確立できるようにしていきたいと思う。

「一人ではなくチームで作る保育」とは見ること、知ること、聞くこと、伝えること

一人ひとりが人的環境を構成する一人として、各々の言動が大きく影響していることを意識して、お互いがお互いを見て所作や言葉がけを大切に取組んでいきたいと思う。